



キラリ通信

平成26年2月1日 第4号

「地域観察の視点と防災行動～いのちを守るアドバイザー養成講座を振り返って～」

三重大学国際交流コーディネーター 水木 千春



三重大学国際交流
コーディネーター
水木 千春
(みずき ちはる)

今月号の内容

1ページ

第4号特別寄稿

(三重大学国際交流
コーディネーター
水木 千春)

2ページ

「エコライフ・・・
冬バージョン」

市民大学キラリ講座案内

3ページ

キラリ市民記者取材記事
尾崎末廣 草川喜種

4ページ

キラリ市民記者取材記事
橋本裕樹

普段の生活の中で、『避難』について考えたことがありますか。2011年3月11日、私たちはこれまで見たことのない巨大地震と津波による自然災害の恐ろしさを目の当たりにしました。そのような状況下におかれても、地域の持つ自然特性や地震と津波の関係を理解し、大人に代わって住民に避難を促した子どもたちがいました。その子どもたちは平時から、学校の算数や家庭科、国語などあらゆる教科の中で防災教育を受けていました。より実践的な防災教育に接した経験がいざという時にたくさんの地域の人たちを救ったのです。

学校教育の重要な目標の一つに、子どもたちの安全で幸福な生活を送るための資質や能力を育てることというものがあります。子どもたちがまずは身近なところから、災害を学んだように、私たち大人も日頃から地域の地形や土地利用やその変遷などの自然特性に興味を持ち、水害や地震、津波などの自然災害に対する地域の脆弱性を理解することができれば、いざというとき、どのような場所に危険を及ぼすのかを予測し、それに対応した適切な行動をとることが可能になります。今一度、身の回りの環境に目を向け、自らの視点で観察することで、地域に根ざした防災意識の高いまちづくりが可能となるでしょう。

災害に対するハード面からの備えは数々ありますが、津波に対するもっとも望ましい対策はいち早い『避難』でした。子どもたちの災害への学びと実践、すなわち安全に『避難』するため、私たち大人でも学べる重要なことを地域観察の視点から探ることを通じて、災害発生時にいかにして「いのちを守る」のかを問いかけた講座だったと思います。

今回の講座で私たちは、いつか起こると言われている災害に対して、どのような意識を持ち、またどのように行動すべきかを一緒に考え、意見交換を重ねてきました。本講座は「本当に大切なこと」を伝えられる「いのちを守るアドバイザー」となるための一助であり、始まりです。今後も防災に対する高い意識を持ち、いざというときに行動できるよう、常に学ぶ気持ちを忘れず、持ち続けていきましょう。

「エコライフ・・・冬バージョン」

装う

最近、色々なお店でエコを意識した暖房器具や衣料品を良く見かけます。

新しい知恵と、昔ながらの生活の知恵を上手くコラボして、エコな冬の過ごし方をみんなで考えてみましょう。

良いアイデアがありましたら、是非、教えてください。今回は、衣食住について誰でも簡単にできることを紹介しません。是非、実践してみてください。



重ね着ばかりすると、着ぶくれになるよね！そこで、「首」のつく場所を温めることで体温を温存する工夫をしましょう。

注意点は、締め付けすぎると血のめぐりが悪くなって逆効果になるのでほどほどにね！

- ・首・・・マフラー、ネックウォーマーを巻いて
- ・手首・・・手袋、アームウォーマー、
- ・足首・・・ブーツをはく、レッグウォーマー



食す

身体を温める効果のある食材、調味料を使って調理し、できるだけ、家族いっしょにいただきます。

- ・身体を温める野菜・・・生姜、ごぼう、れんこん、人参、ねぎ、たまねぎ等
- ・身体を温める飲み物・・・ココア、紅茶、しょうが湯、ほうじ茶等



住む

エコを意識した暖めに努めましょう

- ・アルミの断熱シートの利用・・・電気カーペットやこたつの敷布団の下に
- ・エアコンと扇風機の併用・・・扇風機を、首を少し上向きにしゆっくり回すことで、部屋上部の暖かい空気を循環
- ・床まで垂らしたカーテン・・・窓を完全に覆う工夫

平成26年2月7日(金)卒講式を行い、平成25年度の全講座を終了しました。多数の皆様にも、受講していただきました。



平成26年度「亀山市民大学キラリ」講座ご案内

平成26年度・開講式と「6月講座」

- ・6月13日(金)18時30分～20時、
- ・総合保健福祉センター「あいあい」2階大会議室

平成26年度・「講座予定表」

- ・4月中旬頃に、ホームページ等でご案内をします。皆様のお申し込みをお待ちしています。

～キラリ受講生を募集しています～



「ペットボトル・白色トレイの回収とリサイクル」

「容器包装リサイクル法」に基づき亀山市は今年4月からペットボトルと白色トレイの本格回収を始めました。今までそれらを一般ごみで出すことに慣れていたため、どの程度まできれいな状態にしておさなければならぬのか不明な点がありました。そこで、今回実際に回収処理を行っている亀山市総合環境センターに出向いて回収の目的、回収を始めてからの効果、出す際の注意点等を確認しました。また、ペットボトル処理現場も見学しました。



受け入れ検査および選別



破碎フレーク



破碎フレークの完成
(1袋で約1000kg)

【環境センターへの質問と回答】

1. ペットボトルや白色トレイを分別して回収する目的は何ですか。

(回答)

- 1) エコ活動による環境破壊防止と地球資源の有効活用です。
- 2) ごみ焼却により生じる焼却灰が減少することで廃棄場所の長期確保が図れます。

2. 回収を始めてからどのような効果が得られていますか。

(回答)

- 1) ペットボトル・白色トレイのリサイクル量実績(平成25年4月から9月まで)
 - ・ペットボトル・・・・・・・・・・51,130kg
 - ・ペットボトルのキャップ・・・・・・・・2,610kg
 - ・白色トレイ・・・・・・・・・・3,250kg

2) 全量有価物として業者に引き取られ資源物売却代金として市の歳入に入り、全額を廃棄物収集事業の経費の一部に充てている。

3. 私たちが廃棄する際の注意点について教えてください。

(回答)

- 1) 回収するペットボトルは飲料ボトルに限らず醤油や焼酎のボトルでもPET 1(上図)の印があれば回収するが、容器にPET 1の印があっても皿形のトレイは分別時の確認に時間がかかるため回収の対象外としている。トレイは無着色の白色に限定し、同材質でできている梱包材や断熱材は対象外としている。
- 2) ペットボトルを潰して減容してほしい。各集積所からの搬送は主にパッカー車を使用しており運搬効率が悪い。そのため、ペットボトルを押し潰して出してもらえば嵩が減り分別作業や取り扱いが楽になる。
- 3) キャップは取り外してほしい。
- 4) ペットボトルの内外に汚れがあれば軽く水で濯いでから出してほしい。容器内に油などの汚れがある場合は再利用できないため一般ごみに出してほしい。白色トレイは表面の汚れが落ちている程度でよい。
- 5) 着色ペットボトルは分離作業に時間と人手がかかるため分離して出してほしい。



【所感】

年度目標100トン、既に約60トンが回収されています。私たち一人一人が目標に向かって確実にペットボトルや白色トレイを分別廃棄することでこの目標が達成できると思います。そして、これらがリサイクルされることによりごみ処理費用も軽減することになります。皆で頑張りましょう。(亀山市民大学キラリ市民記者 草川喜種 尾崎末廣)


「市内コンビニのペットボトル排出量調査から学ぶ環境」

夏場が増えるゴミといえ、飲料ゴミ、その多くはかさばるペットボトル飲料である。

ペットボトル飲料は、様々な小売店で販売されているが、スーパーなどで主に販売されている2リットル等の大容量のものはともかく、消費数の多いものは500mlサイズで、小売店の中でも、通勤通学、休暇で外出する際に立ち寄るコンビニエンスストアでの消費が多いと考えられる。



写真(1)



写真(2)



今回は、特にペットボトルごみ排出量の増える夏場において、亀山市内におけるコンビニエンスストアの排出するペットボトルごみの排出量を試算するための取材を行った。取材に協力頂いたのは、サンプルとして、市内のコンビニエンスストア1店舗(ミニストップ亀山川崎店)と、ごみ収集業者1社。期間は8月の約一ヶ月間で、毎日確認することは難しかったため、不定期にペットボトルの排出量を写真で撮影、時に実数を確認した。協力店では、90リットルのゴミ袋でペットボトルごみが回収されていた。8月における一日の平均的なペットボトルごみ排出量は、週2回の収集業者所感では、90リットル袋で、約8袋。一週間に約16袋として、一日約2.3袋。実際に店舗で何度か確認させて頂いた分量は、業者回収時に店内外複数のごみ箱内にあったペットボトル、および駐車場内にも点在しごみ箱に入れられずになげ捨てられたペットボトルごみ等、合わせると一日あたり平均90リットル袋約3袋分であった(写真1)。では、90リットルゴミ袋1袋中には、実際どれくらいのペットボトルが捨てられているかというと、こちらは実際に数えて確認したところ、大小合わせて約100本のペットボトルがあった(写真2)。上記サンプル調査により、夏場はたった1日で、90リットルゴミ袋約3袋分、約300本のペットボトルが、毎日コンビニエンスストア1店舗からごみとして排出されている計算になる。

コンビニエンスストアの来店客数は、月間コンビニ等の専門誌の情報を含めれば、一日約1,000人。約300本のペットボトルが購入され、ごみとなっているということは、3人に一人は夏場に1日500ml1本のペットボトルを消費し捨てている生活をしている事になる。上記サンプル調査により、夏場はたった1日で、90リットルゴミ袋約3袋分、約300本のペットボトルが、毎日コンビニエンスストア1店舗からごみとして排出されている計算になる。

コンビニエンスストアの来店客数は、月間コンビニ等の専門誌の情報を含めれば、一日約1,000人。約300本のペットボトルが購入され、ごみとなっているということは、3人に一人は夏場に1日500ml1本のペットボトルを消費し捨てている生活をしている事になる。

仕事や通勤の行き帰り、行楽や休暇での外出時の小売店でのペットボトル飲料の消費の際には気を付けたい。Co2のさらなる削減を考え、ペットボトル飲料の消費そのものを減らして、水筒の活用への移行などもより環境に貢献できる行為である。

今回の取材では、調査だけで終わったが、ゴミ箱にペットボトルごみだけの分別廃棄を強調する表示や、ペットボトルキャップのみの回収箱を別途設けるなどすれば、市民、生活者そのものによる分別が高まると考えられるので、次回、機会があれば、同じ協力店等で一定期間取り組みを行って、環境意識や行動の改善を目指した取り組み結果を報告できればと考えている。(亀山市民大学キラリ市民記者 橋本裕輝)